

19	受験番号
中	

## 社会その1 (4枚のうち)

みなさんは、日本国外に出たことはありますか。現在、国外への移動手段というと多くは飛行機ですが、以前は船でした。周囲を海に囲まれた日本列島の人びとは、昔から船に乗って周囲の国・地域と盛んに交流し、発展してきたのです。一方で、江戸時代にはいわゆる「鎖国」政策によって外国との交流が制限され、因らずも国外に出てしまった人びとには、厳しい運命が待ち受けていました。今日は、江戸時代に起きた漂流の事例を一つ紹介します。これを通して、「国外に出る」「戻る」ということの意味について探求してみましょう。

1832年10月、鳥羽の港から江戸を目指して出発した一艘の船がありました。宝順丸という尾張国(現在の愛知県)の廻船※で、乗組員は14人、積み荷は米や陶器などでした。江戸時代には、日本の津々浦々をこうした廻船が盛んに行き来し、大量の物資が運ばれていました。宝順丸は、順調にいけば2週間ほどで江戸に到着するはずでした。しかし、鳥羽を出発した後、宝順丸は行方が分からなくなりました。当時、船の遭難は珍しいことではなかったため、宝順丸も難破し、乗組員は亡くなったと考えられました。ふるさとの村には彼らの墓が建てられました。

ところが現在では、外国に残る記録によって、乗組員たちのその後が分かっています。船は現在の静岡県沖で嵐に遭って、帆や舵を失い、14ヶ月も漂流した後、陸地に着きました。生き残っていたのはわずか3人、全員10代20代の若者で、最年少の音吉はまだ16才でした。彼らには、漂着した場所がどこか、全く分かりませんでした。それは現在のアメリカ合衆国の西海岸、カナダとの国境近くでした。3人は、周辺地域を実質的に支配していたイギリスの人びとに保護されます。その後、音吉たちが日本人と判明したので、イギリス本国経由で中国南部のマカオに送られることになりました。1835年12月、3人はマカオに到着しました。当時のマカオは、貿易拠点として欧米の商船が出入りしており、音吉たちの後にも、同じように漂流して保護された日本人が次つぎと送られてきました。他の日本人漂流民4人が、尾張の3人に加わり、以後7人は行動をともにするようになりました。

はじめ、イギリスには、こうした漂流民を政治的に利用しようという意図がありました。しかし、さまざまな事情から、イギリスではなく、中国への進出をはかっていたアメリカが音吉たちを日本に届けることになりました。

1837年7月、アメリカ船モリソン号は、音吉ら7人の漂流民をのせて、江戸に向かいました。漂流民たちは、とうとう日本に帰ることができる、たいへん喜んでいました。ところが、船が三浦半島の浦賀に近づくと、突然砲声が聞こえだしました。砲声は止むことなく、モリソン号が砲撃されていることは明らかでした。モリソン号は、江戸湾に入ることをあきらめ、最終的に鹿児島に向かいました。ところがここでも同じように砲撃を受けて、マカオに引き返したのです。

モリソン号事件の5年後、オランダを介して長崎に、漂流民からの手紙が届きました。この手紙は今も残っています。内容は、<私は漂流して外国に行くことを望んだわけではないし、自分のことを悪人とも思いません。しかし、役人の方がたや親兄弟、親戚に迷惑をかけてしまいました。だから、帰国したい気持ちはとても大きいのですが、あきらめます。お許し下さい。私たちは無事だとみなさまに伝えて下さい。>というようなものでした。漂流民たちの落胆の大きさと望郷の思いの深さをうかがい知ることができます。この手紙は、その後の幕府の政策に影響を与えたと言われています。

その後、7人の漂流民たちは異国でそれぞれの生き方を模索することになりました。尾張の音吉は、オトソンと名乗り、上海でイギリスの商社に勤めました。そのかわりで日本からの漂流民たちの帰国に力を尽くしました。音吉の助けを得て、長崎から日本に帰ることができた人たちの記録がたくさん残っています。また音吉は、イギリスの通訳官として、2回の日英交渉の場に立っています。1849年の最初の交渉時には、自らを中国人と偽りましたが、1854年には自らの素性を明らかにしました。幕末の遣欧使節団の一行は、1862年にシンガポールで音吉に出会っています。当時シンガポールに移住していた音吉は、日本の使節団を訪ね、現地案内をしました。このように、漂流民・音吉は、海外在住の事情通として、情報を提供し、日本人を助け続けました。生まれ故郷や日本という国への愛着を持ち続けながらも、日本に戻れなかった音吉は、自分が何者であるのか、深く考えざるを得なかったことでしょう。

## 社会その2 (4枚のうち)

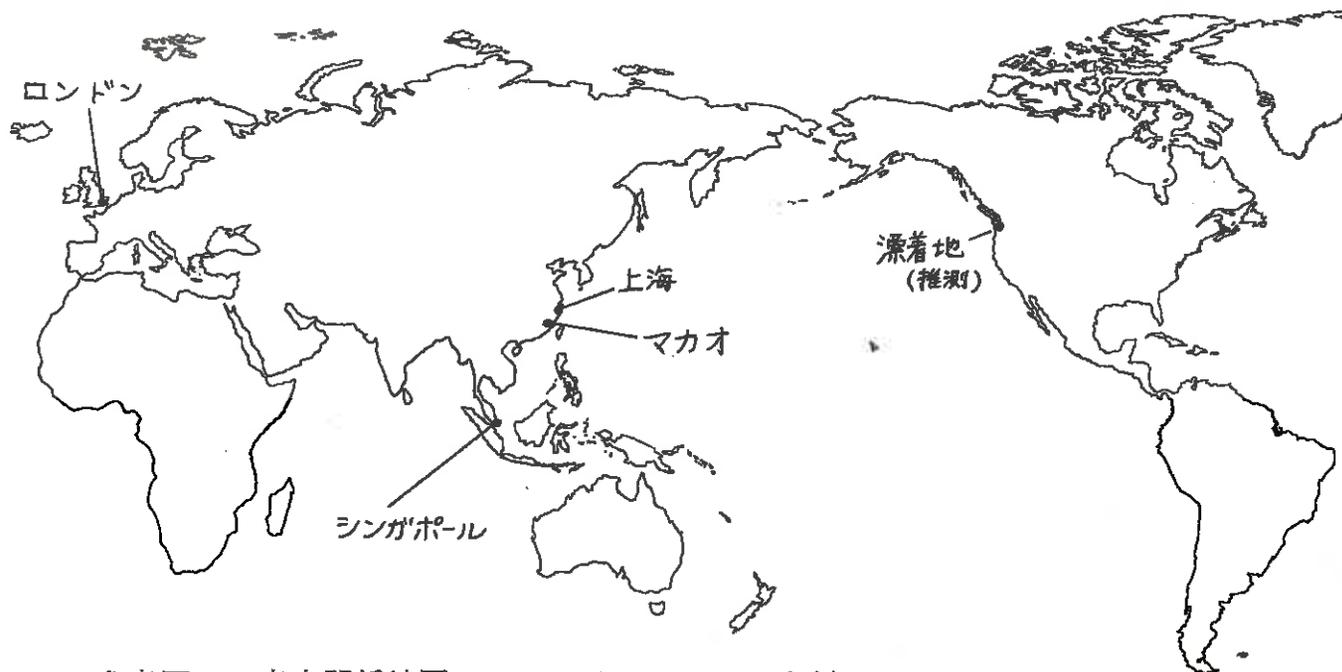
明治時代に入り、1879年、ジョン・ウィリアム・オトソンという人物が来日しました。彼は漂流民・音吉の息子だと名乗り、父はシンガポールで亡くなったこと、そして息子が国籍を得て日本人になることを望んでいたと伝え、日本人となることを願いました。そして、多くの人の尽力を得て無事に認められ、父の名を継いで神戸などで暮らしました。

江戸時代末期に開国されてからは、国外への渡航が厳しく禁じられることはなくなり、逆に日本からの移民が奨励される場合もありました。現在では、海外旅行のように国外へ行って戻ることが容易になりましたが、一方で、国境を越える移動は、各国の制度により、厳格に管理されるようになっています。図らずも国境を越えてしまった音吉の一生から、私たちは多くのことを学べるのではないのでしょうか。

※廻船：国内沿岸の物資輸送に従事する船。



参考図1 音吉の肖像画



参考図2 音吉関係地図 (日本列島は省略しています)

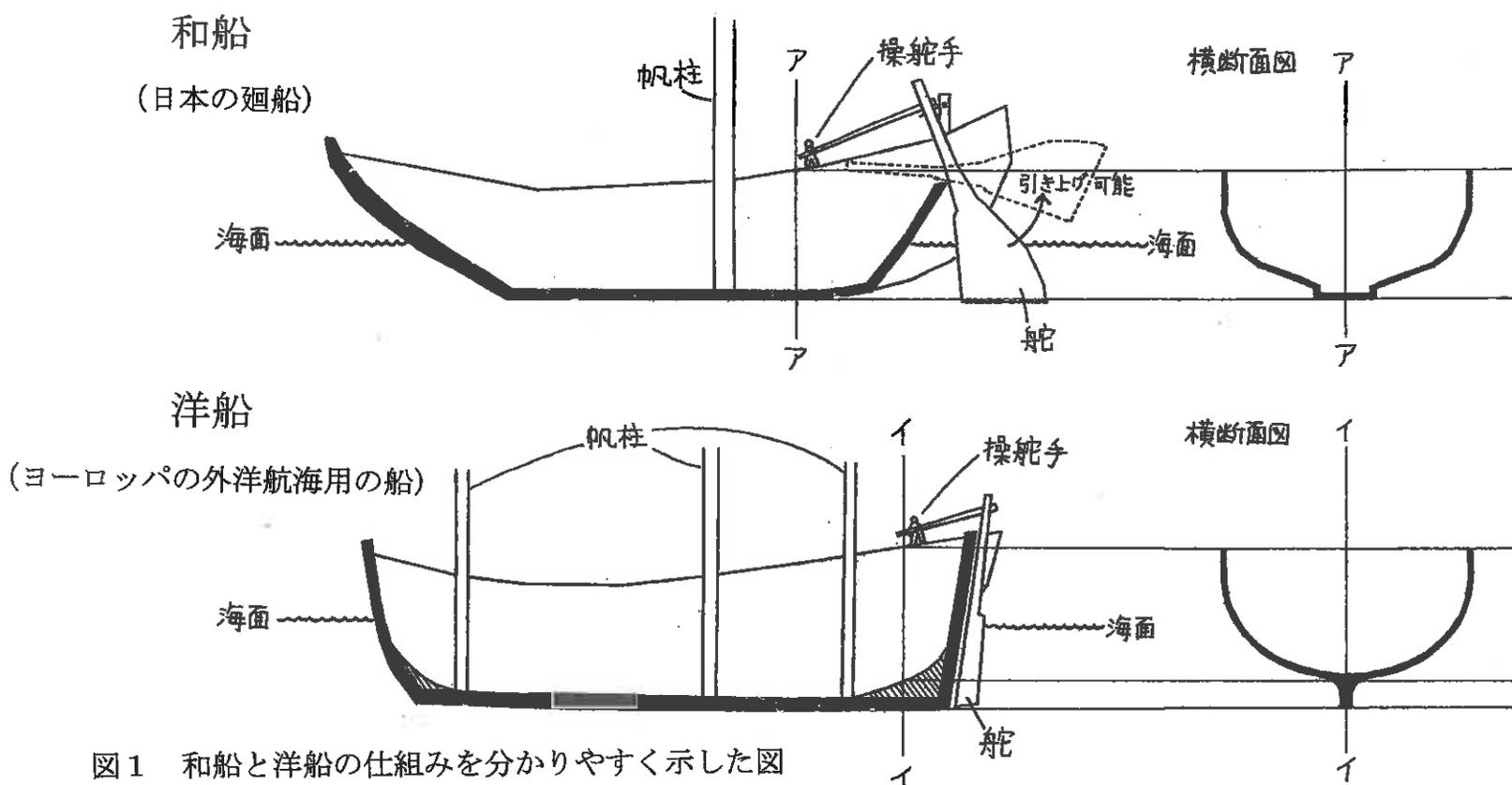


図1 和船と洋船の仕組みを分かりやすく示した図

図の和船、洋船は、ともに長さ30mくらい。

舵：船の後ろに付いていて、船の進む方向を決める

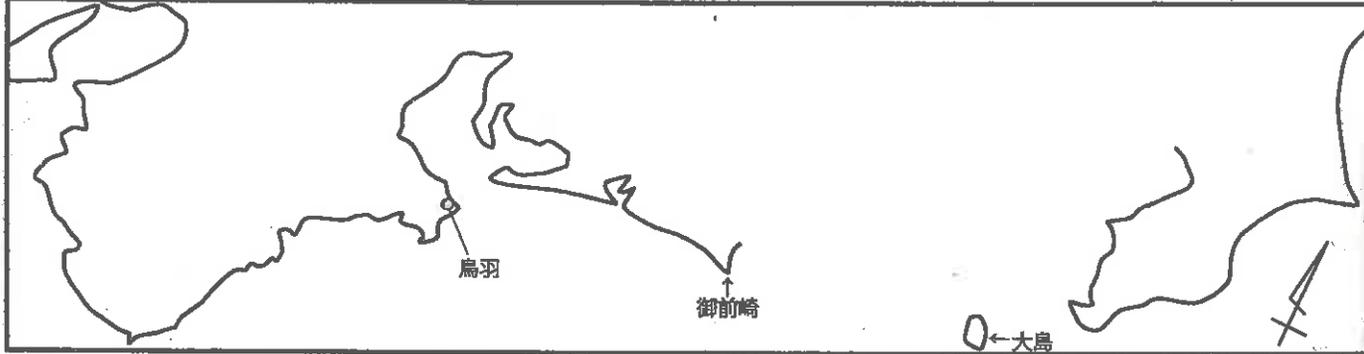
操舵手：舵を操作して、船を一定の方向に進ませる人

19	受験番号
中	

## 社会その3 (4枚のうち)

問1 廻船の航路に関する問いに答えなさい。

(1) 御前崎から江戸までの海岸線を描きなさい。



(2) 廻船が難破する場所は、静岡県沖付近が多く、季節は冬が多かったようです。なぜでしょうか。

問2 日本と中国の交易は、日本が他の国・地域との間で行っていた交流の中でも、大変重要なものでした。

(1) 平安時代の12世紀後半に中国(宋)との交易を主導し、政治的にも勢力を持っていた武将はだれですか。

(2) 室町時代の15世紀はじめに中国(明)と国交を結び、両国の交易も積極的に推進した将軍はだれですか。

(1)  (2)

問3 日本の廻船は、国内流通向きのいろいろな特徴を持っていました。図1で、日本の廻船とヨーロッパの外洋航海用の船を比較して、日本の廻船の構造上の特徴を指摘し、それが国内流通向きと考えられる理由を説明しなさい。

問4 19世紀の日本とイギリスやアメリカとの関係に関する以下の問いに答えなさい。

(1) 日本からの漂流民を政治的に利用しようというイギリスやアメリカの意図は、どのようなものだったと考えられますか。

(2) 19世紀半ばにおける度重なる交渉の結果、1858年に日本がイギリスやアメリカなど欧米5か国との間に結んだ条約は何ですか。

19	受験番号
中	

## 社会その4 (4枚のうち)

問5 モリソン号事件に関する問いに答えなさい。

(1) なぜモリソン号は砲撃されたのでしょうか。

(2) 漂流民からの手紙がオランダを介して届けられたのはなぜでしょうか。

問6 19世紀後半から20世紀前半にかけて、日本から国外にかなりの数の移民が行われました。南アメリカ諸国のなかで、日本人が最も多く移民した国を答えなさい。

問7 第2次世界大戦後の日本からの出国者数は、1970年代以降にそれまで以上のペースで増加するようになりました。それはなぜか、考えられる理由を1つあげ、簡単に説明しなさい。

問8 短期的な旅行ではない、国境を越える人間の移動は、近年も世界の各地で発生し、議論を引き起こす場合があります。あなたの知っている例を紹介し、説明しなさい。